

最優秀賞



『私が看護師を目指すきっかけ』

島根県立松江農林高等学校 小田川 美優

私が看護師を目指すようになったきっかけは曾祖父の死です。

私が小学校六年生の頃、私の曾祖父は、末期の大腸がんでした。松江市立病院に入院していたので、よく学校帰りに母とお見舞いに行っていました。体調が優れない時も、私達のために笑顔で迎えてくれました。入院する前の曾祖父は、あまり笑顔も無いし、会話することも滅多にありませんでした。しかし、入院してからは会う機会が増え、曾祖父の感情がよく分かるようになりとても仲が深まりました。

入院して二ヵ月後、どんどん病状が悪化していき、余命一ヵ月と言われました。私は、その話を聞いた時、涙が止まりませんでした。しかし、一番泣いていたのは私の母でした。私の母と曾祖父は昔から仲が良く常に一緒に居ました。泣き崩れた母を見て私は声をかけてあげたいと強く思ったが、自分に精一杯で声をかけてあげることができませんでした。そんな時、私の母を救ってくれたのが看護師の方でした。「大丈夫ですか」と背中をさすってずっとそばにいてくれました。その看護師の方も親戚が亡くなったそうでその時の辛かった出来事などを話してくれました。最後亡くなる前に後悔のないようにしっかり気持ちを伝えた方が良いというアドバイスを頂きました。なので私も、私の母も最後に曾祖父に気持ちを伝えようと決意しました。

最後気持ちを伝える前日、何度も手紙を書き直しました。本当に亡くなってしまふんだという悲しみや、今までの楽しかった思い出などが蘇りました。気持ちを伝える時、とても緊張しました。もう、曾祖父は耳も聞こえづらかったので思いが伝わりづらい時もあったけど曾祖父は泣いて喜んでくれました。後悔の無いように思いを伝えるきっかけをくれた看護師の方には本当に感謝しかないです。なので私も、患者さんや患者さんの家族の方に寄り添える看護師になりたいです。

優秀賞

『夢への道のり』



出雲市立大社中学校 柿田 凧爽

私は、小学三年生の頃に足を怪我し、手術をしました。入院生活＝怖くて寂しいというイメージを覆し、最高で濃い思い出を作ってくくださった看護師の皆さんには本当に感謝をしています。

手術当日には、たくさんの看護師さんと一緒にしまねっこを見つけてシールをゲットするというゲームで楽しみながら手術室に向かいました。私にはこんなに応援してくれる人がいると実感し、今でもあのほっこりとした温かい空気を覚えています。手術後からは、毎日激痛がはしり泣いていました。一人の時間が多く、病室にはほかの患者さん。叫びたいし、誰かに想いを吐きたくても心の中で抑えていました。そんな時に私を支えてくれた一人の看護師さんがいました。その人は優しい瞳で私を抱いてくれました。すると、涙が自然と流れ出て、思いっきり泣いてしまいました。周りの目も気にせず、強く私が白衣を掴んだため、今思うと恥ずかしいのですが、一生の大切な思い出です。更に看護師さんは私が好きなキャラクターを手描きでテープに描き、足のギブスに貼ってくれました。その日から、御守りとしてたくさんの人に自慢をしました。リハビリも頑張れたし、ギブスをつけていることも恥ずかしがらずに堂々と過ごせました。そしてそのテープは今でも私の大切な宝物としてとってあります。

四ヶ月後に、二回目の手術をしに入院しました。その時は早く看護師の皆さんに会いたくて、ドキドキしていました。病棟に着くとすぐ目が合い、私の名前を嬉しそうに呼んでくれました。好きな人と再会した時のような最高の瞬間でした。幸せな生活を過ごしたこの病院を「第2の故郷」と呼ぶほど、今でも愛しており、改めて感謝しかありません。

私はこの経験から、将来、看護師を目指しています。お世話になった看護師の皆さんのような患者さんに寄り添い、親しみやすく、そして心の支えになる存在になりたいです。

優秀賞

『憧れ』



島根県立浜田高等学校 永田 眞央

高校二年生の冬、私は左足の手術のため入院しました。初めての手術に不安と恐怖を抱いたまま入院日を迎えたことを覚えています。

手術当日、私はあまりの恐怖に足がすくんで手術室の扉をくぐることができませんでした。そんなとき「大丈夫、怖いかもしれないけどきつとうまくいくよ。」と何度も背中をさすってくれたのは看護師の方でした。新型コロナウイルスの影響で家族に付き添ってもらうこともできなかったのも、その言葉が前日から手術が怖く元気がなかった私を勇気づけてくれました。また、手術台に行くまで手を握って楽しい話をしてくださいました。その日の夜には、痛みのあまりなかなか眠れず何度もナースコールを押してしまっただのにもかかわらず、嫌な顔ひとつせず駆けつけてくださいました。そこでも「大丈夫だよ、もう少し頑張ろうね。」と優しく声をかけてくださいました。翌日から徐々に痛みも引いていき、お風呂に行けるようになると私の車椅子をひきながら話し相手になってくださいました。日中は友達も学校のため看護師の方とお話することが私にとって一番の楽しみで心の支えでした。この治療は家族や友達だけでなく看護師の方の支えで乗り越えることができたと思っています。

入院を通して看護師という存在がいかに大きいか実感することができました。また、看護師という仕事に憧れを抱くきっかけとなりました。看護師は身体面でのケアだけでなく精神面でもケアをし、たくさんの人を助けることができる素敵な職業です。その看護師を目指すための一歩として、私を支えてくれた看護師の方のように日々の生活で苦しんでいる人に手を差し伸べることのできる人になろうと思います。私がしてもらったことを今度は恩返しする番です。多くの患者の気持ちに寄り添うことのできる看護師を目指して人の支えとなるよう頑張ります。

優秀賞



『ナース服を着るために』

島根県立江津高等学校 横田 萌花

「将来の夢はあるか」高校入学後の担任の先生からの言葉だ。小学生の頃、医療系のドラマを見て、看護師さんが何度も失敗をしながら経験を積み重ね、一人の人間として立派な看護師に成長する姿に感動していた。調べ学習の時には必ず看護師を選択していた私は、「看護師が気になっている」と答えた。高校では様々なことに挑戦し、新しい自分を発見したいと考えていたので、一つの挑戦だと思い看護体験に参加することにした。

看護体験の当日、私はドラマや本とは違う体験ができるかもしれないとワクワクする反面、内気な私がコミュニケーションをうまく取れるかと不安でいるうちに、体験する病院に到着した。机の上に置かれたナース服に真っ先に目がいき、着られる嬉しさから思わず笑顔になった。実際に着てみると看護師になれた気がして嬉しかったが責任感も感じた。

コロナ禍であったため、患者さんにシャンプーをしてあげる清潔体験ではなく、病院の施設案内の後で看護師さんの仕事内容について教えてもらうことになった。手術台の上に横になるなど普段できない貴重な体験もできた。この看護体験を通じて最も印象に残ったのは看護師さんと患者さんの関係だ。患者さんの性格に合わせて声のトーンを変えるなど、個別に違う対応をして、患者さんに忙しいと思わせない看護師さんの姿を目にした。実際に看護体験をするまでは、看護の仕事は忙しく大変なイメージばかりだったが、患者さんの悩み事を聞いて寄り添い、ポジティブ思考に考えてあげる様子が伝わってきた。患者さんとの関係の上で成り立っている看護の現場を実感した。

この体験を通して看護師を目指す意欲がより一層強くなった。また、自分にとっても成長できる良い機会となった。ナース服を着たときの責任感を忘れず、信頼される看護師になるという大きな目標に向かって、これからの自分を磨いていきたい。